The Catcher in the Rye

――ホールデンと「自分探し」の旅――

西　川　栄　子

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ホールデンの人間像
　1．“phony”への抵抗
　2．自己矛盾～その場限りの嘘
　3．成立しないコミュニケーション
　4．ホールデンの家族
　5．「ライ麦畑の捕らえ人」～“innocent”な世界への憧憬
　6．再出発～ホールデンの未来像
Ⅲ．おわりに

Ⅰ．はじめに

The Catcher in the Rye は，1951年に発表されたJ. D. Salinger（1919－）の代表作であり，出版されるや否や圧倒的な人気を博した。1959年，ノーベル賞作家W. C. Faukner（1897-1962）はこの小説を「現代文学の最高峰」と絶賛したが[1]，刊行以来およそ半世紀を経た今日でも，アメリカ文学界において不動の地位を占めている。

日本ではこれまで，*The Catcher in the Rye* の翻訳本が３人の訳者によって出版されている。すなわち，1952年の橋本福男の『危険な年齢』（ダヴィッド社）に続き，1964年の野崎孝の『ライ麦畑でつかまえて』（白水社），そして2003年，作家・村上春樹による『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（白水社）であり，それぞれタイトルも異なっている。

とりわけ近年，村上春樹による40年ぶりの新訳本の出版を機に，日本でもサリンジャー熱が再燃し，新たなブームを呼んだのは記憶に新しい。当時の新聞は「いまの米国で平均的と思われる少年が今まで読んだ本のベストは『キャッチャー・イン・ザ・ライ』である」（朝日新聞・天声人語／2003年５月２日）と伝えている。また村上自身も共著『サリンジャー戦記』の中で「この50年ばかりのあいだに『キャッチャー』を読んだ多くの（おそらく数百万という数の）青年たちが『自分は孤独ではないんだ』と感じたと言う事実」に触れ，それは「偉

大な達成」であると述懐する[2]。こうした状況は，俗世からはみ出したアンチ・ヒーローのホールデン・コールフィールド（以下，ホールデンと略す）を主人公とする小説によって，多くの若者が少なからず精神的な救いを得たことを示唆している。

日本では，野崎孝による訳本の売り上げはすでに計250万部を超えた。また，世界全体（約100ヶ国）でみると，原書，翻訳を合わせて計6000万部（アメリカ国内では1500万部）に上ると言われる。現在でも，世界中で年間25万部を売り上げるほどの驚異的なロングセラーであり，皮肉を込めて“サリンジャー産業”と評されるほどである。

ではなぜ，この作品がこれほど読者を魅了してやまないのだろうか。「アメリカの青春のバイブル」，「不朽の青春文学」と言われる作品の魅力はどこにあるのか。本稿では，野崎訳『ライ麦畑でつかまえて』を素材として，幾つかの視点から主人公ホールデンの人間像に迫りたい。

Ⅱ．ホールデンの人間像

小説は，アメリカ西部の病院で，長期の入院を経て病気から回復しつつある[3]17歳の高校生ホールデンが，成績不良のために３度目の学校を追い出された去年の出来事を，自ら回想する形で綴られていく。しかもそれは，クリスマス休暇を前にしたほんの３日間の出来事である。小説全体は，1950年代ニューヨークの若者の軽妙な口語調を駆使しながら，一人称を主語に語られる。冒頭の一文を見てみよう。

> IF YOU REALLY want to hear about it, the first thing you'll probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like, and how my parents were occupied and all before they had me, and all that David Copperfield kind of crap, but I don't feel like going into it, if you want to know the truth. (1) （以下，テクスト（p.45参照）からの引用はカッコ内にページを記す。）

ここで使われる“you”は，「君は」と邦訳されている場合と，特に邦訳されていない場合とがあるが，全体としては後者の方が多い。しかも，この“you”は必ずしも特定の誰かを想定しているのではなく，ある時には読者である「あなた」に向かって語りかけ，またある時には主人公ホールデンが自分自身に語りかけるという「独白」の形式をなしていると捉えられる。このような“you”の効果的な使用に加え，歯切れ良く生き生きとした口語英語が小説全体の柔軟な文体を作り上げ，主人公の心の起伏を巧みに表現している。小説は，こうした読者への「語り」と「独白」を軸に，主人公と彼を取り巻く人々が交わす「会話／対話」

が随所に散りばめられた形で進んでいく。

1．“phony”への抵抗

ホールデンは，自らのことを次のように紹介している。

> I shook my head. … I also say “Boy!” quite a lot. Partly because I have a lousy vocabulary and partly because I act quite young for my age sometimes. I was sixteen then, and I'm seventeen now, and sometimes I act like I'm about thirteen. It's really ironical, because I'm six foot two and a half and I have gray hair. I really do. The one side of my head —the right side—is full of millions of gray hairs. I've had them ever since I was a kid. And yet I still act sometimes like I was only about twelve. (9) （以下，引用文中の下線は筆者による。）

ホールデンの頭の右半分が白髪であるという上記の記述には，作者であるサリンジャーの意図が窺える。つまり，白髪は「大人の世界」，黒髪は「子どもの世界」の隠喩／メタファーである。そしてホールデンは，子どもから大人への移行期にあって両方の世界を持ち合わせているか，またはどちらにも属さない中途半端な状態にあることを暗示しているように思われる。

彼の会話を分析すると，大人の世界の“phony”に対する痛烈な批判が多く，そこに彼のキャラクター，すなわち年相応に振る舞えない現実の姿が映し出されている。一般に，ホールデンにとってこの“phony”は，「純真無垢」や「天真爛漫」を意味する“innocence”と対置されると言われる。彼は世の中に存在する偽りやインチキを真正面に受け止め，糾弾する。そして“phony”という単語は「インチキ」の他に，状況に応じて「猫をかぶって」「いやったらしい」「ごまかし」「インチキきわまる」「嘘っぱち」「気取った奴ら」「インチキ野郎」「インチキ坊主」などと様々に訳され，小説全体を通して計48回も登場することからも，ホールデンのキャラクターを探る上でのキーワードであることは疑いない。

さて，小説の最初に登場する会話の相手は，彼に落第点をつけた歴史教師，スペンサー先生である。ホールデンは，ペンシー校在学中に５科目のうち４科目を落とし，その上勉強する意欲もないために退学せざるをえなくなった。スペンサー先生から手紙をもらった彼は，別れの挨拶をするために先生宅を訪れる。そこでスペンサー先生は，以前に校長先生が彼に忠告したときと同じ言葉を繰り返す。

"Life is a game, boy. Life is a game that one plays according to the rules."
"Yes, sir. I know it is. I know it."
Game, my ass. Some game. …
Nothing. No game. (8)

この会話をみる限り，ホールデンは先生の忠告をいとも素直に受け入れているようである。だがその直後,「競技だってさ，クソくらえ。たいした競技だよ。……とんでもない。競技でなんかあるもんか。」(16) と本音を吐いている。先生には敢えて面と向かって反抗しないものの，心の中では全く逆のことを考えているのだ。そして，教師というものは生徒を窮屈な型にはめ，決められた基準に則って人生を歩ませようとしているだけであると，心中で反駁する。先生とのやりとりはさらに続く。

… "I had the privilege of meeting your mother and dad when they had their little chat with Dr. Thurmer some weeks ago. They're grand people."
"Yes, they are. They're very nice."
Grand. There's a word I really hate. It's a phony. I could puke every time I hear it. (9)

先生が彼の両親のことを褒めた後,「《りっぱ》か！これこそ僕の嫌いな言葉なんだ。インチキだよ。聞くたんびにヘドが出そうになる。」(18) と，自らの胸中を吐露する場面である。彼は，他人の言葉や行動に対してときに病的とも言えるほどの鋭い感受性をもつ。そして，日常生活において一般人ならば軽く聞き流すような些細なことも，重大に受け止めてしまう。

同様に彼は，心にもないうわべだけの誉め言葉や挨拶にも敏感に反応する。例えばホールデンは，人と別れる際に "Good Luck!"（「幸運を祈る！」）と言われるのが嫌いである。別れ際，スペンサー先生が「さよなら，坊や」に続けて，社交辞令のように言い放った「幸運を祈るよ」は，ホールデンにはとてもひどい言葉に感じられた。彼は，他人から気軽に "Good Luck!" と言われると，気が滅入ってしまうのだ。妹の学校へ行き，校長室で老女と雑談して別れる場面でも,「幸運を祈ってますよ！」と何気なく言われたその言葉に関して,「こんな心にもない言葉を自分は人には言えない」と "you" に向かって本音を漏らしている。

ところで，ホールデンがとりわけ "the phoniest bastard" (13) と酷評する人物がいる。

それは，ペンシー高校の前に在学していたエルクトン・ヒルズ高校の校長である。金持ちの親には愛想良く振る舞い，そうでない親には見下した態度をとる校長を，ホールデンは決して許せない。同様に，ペンシー高校の卒業生であり，今は葬儀屋を営むオッセンバーガーという男も，インチキな大人として象徴的に描かれている。事業で儲けた金を学校に寄付したり，学校の新寮に〈オッセンバーガー記念棟〉を建てたり，生徒への演説では自らの美談を並べ立てる彼の姿は，ホールデンにとってはまさに“the big phony bastard”（17）なのである。

このように，“phony”に対するホールデンの反撥は，多くの場合，権力者や金持ちなど社会的に優越する人々（会社の顧問弁護士である父親も）の差別的な言動や高慢な態度への抵抗となって表れる。大人の世界では，社会正義よりも名誉・権威・権力，そしてそれらと結びついた利益や金銭が優先事項になりうるという事実を，彼はなかなか受け入れられない。さらに彼の批判の対象は，ときに大人だけでなく，同年代の仲間たちの俗物的な態度にまで及ぶのである。

一般に，ホールデンのような十代の若者は，人生における自己の明確な基準がまだ持てないのに，社会的なルールを強いられることが多い。つまり，周りの大人は往々にして〈かくあるべき〉という生き方を子どもに強要するため，競争というレースから外れた者は，あたかも人生における敗北者の烙印を押されたかのような錯覚を覚えてしまう。こうしたことは，多感な時期にある者にとってはときに耐えがたい苦痛や重荷となり，結果として批判の矛先が周囲に向けられることもあるだろう。ペンシー高校の教師や父兄たちが，ホールデンにとっては単なる名門校のレッテルを振りかざす「へどが出そうなインチキ野郎」としか映らないのは，そのようなことの表れとも考えられる。

ここで注目したいのは，ホールデンが大人の欺瞞に満ちた社会に憎悪の念を燃やしながら，同時に，会話の相手に対しては感情を傷つけまいと彼なりの配慮を見せている点である。つまり前述のスペンサー先生の言葉に対し，その場では反論せず，「はあ，そうです。……」と相槌を打って取り繕っているのである。ホールデンは，インチキを含む広い意味での“大人の嘘”に対して敏感に反応する一方で，相手の調子に合わせようと，時には心にもないことを言ったりおべっかを使うといった矛盾する一面も持っているのである[4]。

2．自己矛盾～その場限りの嘘

このように，大人の心の内を鋭く見抜き，大人は嘘つきだと断定しながらも，ホールデン自身が，自分は嘘つきだと認めて平気で嘘をつく場面が多いのは興味深いことである。彼は，「僕はいったん嘘をつきだすと，その気になれば，なん時間でも続けられるんだ。嘘じゃない

よ。なん時間でもなんだ。」(93) と豪語する。現実と向き合わず，むしろそれから逃避しているのであり，こうした現実離れした嘘の世界に身を委ねる姿が窺える。

ここで，汽車で隣に乗り合わせたモロウ夫人という中年女性との会話を例に挙げたい。彼女は，ホールデンがペンシー高校の生徒であると知るとすぐに，息子のアーネスト・モロウも同じ高校に通っているのだと親しげに話しかけ，ホールデンに名前を尋ねる。するとホールデンはとっさに，「ルドルフ・シュミットです」と，学生寮の門衛の名前を勝手に名乗ってしまう。何も知らない夫人は，息子がとても優秀な生徒であることを得意そうに話す。アーネストが実はそうではないことを知っているホールデンは，母親なんて子どもの本当の姿はわかっていないし，自分の息子がどれほど優秀な人物かを聞きたがるものだと，読者に向かって冷ややかに語るのである。その上で，ホールデンはアーネストについての「おべんちゃら」を並べ立て，クラスの仲間がアーネストを級長に推薦しようとしたのに，彼は謙虚にそれを辞退したという作り話までする。さらに，「クリスマス休暇前なのになぜ帰郷するのか」という夫人の問いかけに対し，「脳の手術を受けるためだ」と嘘を続ける。

後に，ニューヨークの安ホテルに泊った夜，ホールデンはエレベーターの中で，ホテルのボーイに女の子と遊ばないかと買春をすすめられる。しかし，本当はそんなことをするのは自分の主義に反することだと迷いつつも，つい受け入れてしまう。そして，部屋に入ってきた売春婦に，自分のことを次のように説明する。

> "Allow me to introduce myself.　My name is Jim Steele," I said. …
> "Hey, how old are you, anyways?"
> "Me? Twenty-two."
> "Like fun you are." (94)

しかしながらホールデンは，売春婦と何を話したらよいのかわからず戸惑ってしまう。そしてやはり気が乗らず，結局，自分は脊髄管の中にあるクラヴィコードの手術を受けたばかりでまだ回復していない，という何とも奇想天外な理由で断ってしまう。クラヴィコードとはヨーロッパの古典楽器のことだが，女はその意味を知るはずがないだろうと思い，とっさにでたらめを言ったのである。

その他にも，ホールデンは自分の年齢を，12歳，22歳，42歳，86歳であると折に触れては偽る。そして読者に向かって，「僕みたいにひどい嘘(うそ)つきには，君も生まれてから会ったことがないだろう」(28) と得意げに語る。

このように，会話の相手の気持ちを読み取りながら，相手にとってはわかりきった嘘であることなど構わず，流暢に嘘をついてその場を繕う。まるで，自らの嘘に対する相手の反応やそれによって刹那的に続いていく会話を楽しんでいるかのようである。ホールデンは，子どもの世界と大人の世界の間を彷徨い，両者のジレンマに悩むために，その場しのぎの嘘をついたり，他人に対する不平・不満を並べるのだろうか。社会に対する反抗者，インチキを憎む正義感の強い若者として描かれながら，同時に，自らも嘘を繰り返すという矛盾が露呈されている。

そして，すぐにばれてしまう嘘をついた後で，読者である“you”に対してはすぐさま弁解する。つまり彼は，大人がホンネとタテマエを使い分けることに「インチキ」とレッテルを貼り反撥しながらも，実は彼自身もその両方を無意識に使い分けている。しかも，彼は大人との会話の中ではタテマエに従い，“you”に対してはホンネを吐露する。言い換えれば，大人を嫌悪の象徴として皮肉りつつも，実は大人とのかかわりにおいては，巧みな使い分けによって自らの立場を守ろうとしているのである。

以上，ホールデンの嘘にみる大人まがいの会話について述べたが，他方，16歳の少年に相応しい偽りのない会話もみられる。次に，その点について触れたい。

小説では，ホールデンが友人と対等の関係を築きながら，若者らしい丁丁発止の本音の会話をしていく場面も数多くみられる。例えば，彼が好意を寄せているジェーン・ギャラハーという女の子をめぐって，同室のストラドレーターと喧嘩する場面がそうである。ジェーンを誘ったストラドレーターは，夜通しデートをして寮に帰る。当然ながらホールデンは心穏やかでなく，デートの様子をあれこれ詮索する。「それは職業上の秘密」であると，まともに答えようとしない友人に対し，ついにホールデンは本気で怒り出し，声を震わせ興奮する。そして，二人は殴り合いの喧嘩となる。

> “Holden, God damn it, I'm *warning* you, now. For the last time. If you don't keep your yap shut, I'm gonna—”
> “Why should I?” I said— I was practically yelling.
> “That's just the trouble with all you morons. You never want to discuss anything. That's the way you can always tell a moron. They never want to discuss anything intellig —”
> Then he really let one go at me, … (44-45)

さらにホールデンが，カール・ルースという先輩に対し，真っ向からプライベートな女性関係を詮索する場面では，「…おれは，コールフィールド（筆者：ホールデンの姓）的質問には答えないからな。おまえはいったい，いつになったら大人（おとな）になるんだ？」（225-226）と突き返されてしまう。そして，「お前の頭はまだ未熟だから」と言われたことに対し，「そうなんだ。その通りなんだ。自分でも分かっているんだ」（229）と素直に認め，デートの約束があるからと帰ろうとするルースを必死に引き止めようとする。「お願いだ。僕はひどく寂しいんだよ。嘘じゃないんだ」（231）と，彼は本心を打ち明けるが，ルースはそれに応えることなく帰ってしまう。

ここでは，友人に相手にされていないことを認識しながらも，自らの切実なる思いが率直に表現されている。つまり，そこで述べられている言葉は偽りのない真実である。そこでは，大人との会話とはまた質の異なる，年令相応の対等の会話が成立していると言える。

このように，自らの思いを隠すことなくぶつける相手とのやりとりから読み取れるのは，彼は，人間は独りでは生きられない存在であることを，漠然とではあるが気づいているということだ。さらに，例えば会っても全く嬉しくない人に向かって「お目にかかれて嬉しかった」と言わなければならないということは，生きていく上での術であることも心得ている。しかしながら，様々な意思をもつ他者一人ひとりをどのようにして受け入れるか，いかにして対人関係を築き，維持していくべきかというテーマについては，まだ十分に理解し体得できているとは思えない。“phony” なるものへの嫌悪とその受容への苦しみ，それが彼の現実の姿なのであろうか。

3．成立しないコミュニケーション

コミュニケーションとは，ボールのやり取りによって成立するまさにキャッチボールのようなものであり，相手のことをよく理解し，相手の意思を汲み取ることで初めて成立する行為である。ホールデンにとって，コミュニケーションとはどのような意味を持っているのだろうか。彼がニューヨークでタクシーに乗ったとき，運転手と交わした会話を例に引いてみたい。

> “Hey, Horwitz,” I said. “You ever pass by the lagoon in Central Park? Down by Central Park South?”
>
> “The *what*?”
>
> “The lagoon. That little lake, like, there. Where the ducks are. You know.”
>
> “Yeah, what about it?”

"Well, you know the ducks that swim around in it? In the springtime and all? Do you happen to know where they go in the wintertime, by any chance?"

"Where *who goes*?"

"The ducks. Do you know, by any chance? I mean does somebody come around in a truck or something and take them away, or do they fly away by themselves—go south or something?" …

"How the hell should I know?" he said. "How the hell should I know a stupid thing like that?" (81-82)

この場面では，運転手は訳のわからないホールデンの会話の相手をするはずもなく，コミュニケーションは成立しないまま終わってしまう。実はホールデンは退学になったばかりで，この先の自分の不安定な境遇をアヒルの運命に重ね合わせ，これからの寒い時期アヒルはどうなるのかと問いかけたのだ。運転手はその質問の真意が理解できず，まともに答えてくれない。ここでは，ホールデンの真摯な問いかけに対して相手が誠実に答えてくれないことを，故意にはぐらかして答えようとしないのだと彼は勝手に思い込み，新たな"phony"を見出してしまうという構図も読み取れる。

ホールデンにとっては，自分の真意を相手が積極的に理解しようと努め，同じ目線で会話をしてくれることで，互いの信頼関係の基礎が成り立つのだろう。つまり，彼にとってのコミュニケーションが成立するのだ。それは自分本位のコミュニケーションとも言える。そして現実においては，そのような一方的な期待が裏切られることは少なくない。このように，自らの問いに親身になって答えてくれない相手の言動に傷つき悩む若者は，現代にも多く存在する。

一方，彼のコミュニケーションのとり方を探る上で注目すべきは，「電話をかける」シーンが多いことである。電話はこの小説において，直接対面することなくコミュニケーションを図ることのできる手段の一つとして，効果的に用いられる。ホールデンは，都会での独りぼっちの寂寥感を紛らわすために，自分から電話をかけることが多い。孤独に耐えられずに，絶えずコミュニケーションの相手を求める寂しがり屋の一面が表れている。ニューヨークでの３日間にかけた電話の回数は７回だが，実は17回も受話器を取ってかけようとしていたのである。好意を持つジェーン・ギャラハーにかけようとしたのは７回だが，実際にかけたのは２回であり，しかも結局本人には通じなかった。そこには，思いを寄せる相手に対する消極的な態度が垣間見える。

ホールデンの生きた1940-50年代には，携帯電話やメール，インターネットなどの現代的な

通信手段は当然ながら存在せず，主に電話や手紙が用いられていただろう。しかしながら，文明の利器としてどれほど進化を遂げようとも，これらのコミュニケーション手段は相手に簡単にアクセスできそうでいて，実はできない道具なのである。つまり，どんなに便利な手段があろうと，そこに自らの積極的な意思の伝達と相手による受け容れという，自己と他者双方による働きかけがない限り，真のコミュニケーションは成立しないのだ。

4．ホールデンの家族

ここで，ホールデンの家族について触れておきたい。

両親はニューヨークに住み，父親の職業は弁護士で会社の顧問弁護士をしているが，小説を読む限り，ホールデンにとっては批判の対象でしかないことがわかる。母親のことは明確にされていないが，妹フィービーとの会話（275-277）からは，ごく普通の母親のようである[5]。ホールデンは4人きょうだいの次男であり，兄弟達も様々な形で登場する。兄のD.B.（兄には批判的であるためか，弟や妹のように名前は明らかにされずイニシャルだけで登場する。）は流行作家で，現在はハリウッドに住んでいる。そして，白血病で死んだ2つ年下の弟アリーと，10歳になる妹のフィービーである。

小説の冒頭で，彼は両親について「……僕の両親てのは，自分たちの身辺のことを話そうものなら，めいめいが2回ぐらいずつ脳溢血を起こしかねない人間なんだ。そんなことでは，すぐ頭に来る方なんだな，特におやじのほうがさ。」（5）と述べている。この点について，『ライ麦畑でつかまえて』を支えているものの一つに，作者自身の少年期における‘traumatic’な体験があるという指摘もある[6]。

作者サリンジャーの父親はユダヤ人で，母親はアイルランド人であった。反ユダヤ主義が強かった子ども時代，サリンジャーはいわゆるhalf-Jewishとして，ユダヤ人のコミュニテイにも，WASPのコミュニテイにも入れないという，どっちつかずの不安定な状態に身を置くことを余儀なくされた[7]。このような背景があったためか，サリンジャーの両親は家庭の事情をあまり深く知られたくないと思っていたようである。この点に関して，状況は異なるものの，サリンジャーはホールデンの両親と自分の両親を重ね合わせているようだ。

ホールデンの両親は，子どもの教育に関しては放任主義で，金銭的な尻拭いはするが，子どもの立場に立って心から理解しようとはしてくれない。妹のフィービーは，兄が高校を退学になったことで「パパに殺されるのではないか」とひどく心配するが，それに対してホールデンは，「いや，そんなことはない。パパがやるのは，どんなに悪くても，また僕をどなりつけて，それから軍隊の学校へやるくらいが関の山さ。」(258) と言い放つ。その言葉からも窺えるように，ホールデンが何度も退学させられているのに，息子を叱責するのみで，彼の

抱える問題の本質を理解せず，真剣に取り組もうとしない。

本来，親であれば，子どもが自らの足で自らの道を歩き始めるときまでは，ひたすら子どもの心に寄り添って支えてやるのが望ましいだろう。たとえ子どもがどんなに親にとって不可解な言動をとったとしても，そこには必ず子どもなりの理由があり，とりわけホールデンのようにデリケートで相手の心を鋭く洞察してしまう少年の心中には，何らかの訴えや叫びが潜んでいるはずである。彼の本音の語りからは，このことが容易に読み取れる。だがホールデンの父親は，息子の退学の世間体の悪さだけを気にかけて外見を取り繕うとする。こうした父親の姿は当然のことながら，実際の姿とは異なるかもしれない。しかしながら，独白という形式から，少なからずホールデン自身は父親の言動を“phony”の象徴として捉えていることは確かである。

5．「ライ麦畑の捕らえ人」～“innocent”な世界への憧憬

ホールデンは自己を取り巻く社会の“phony”なるものに敵対し，絶望し，周囲とうまく適合できない状況に陥るが，これに対して最も彼に“innocent”な世界を感じさせたのは，妹のフィービーであろう。彼女は，“phony”の対極にあるものとしての“innocent”な魂を持つ子ども／人間の象徴として描かれている。

なお，この小説の一般的解釈では，日本語で「無邪気な」「純真無垢」を意味する“innocent”が“phony”に対比されるものとしてイメージされている。この点について，次のような解釈がある。

> It is intriguing to note that “phony” has no exact contrary; “wrong” has “right”, “square” has “hip”, “out” has “in”, but “phony” — bypassing “sincere”, “true”, “real”, none of which quite fit — has only the vague and awkward “nonphony” as its affirmative opposite.[8]

“phony”の正確な反対語はなく，強いて言えば“nonphony”であろうという指摘は興味深い。一般に，“innocent”の文法上の反対語としては“guilty”“evil”“vicious”などが想定される。解釈は様々であるが，ここでは，ホールデンが“phony”の対極として求めている“innocent”なる世界について考察する。

彼はとりわけ妹のフィービーを可愛がっており，彼女との会話には，他では見られない純粋で心優しい兄の姿が見てとれる。深夜，両親に気付かれぬようニューヨークの家に忍び足で戻った彼は，目を覚ましたフィービーと長い会話を交わす。兄のことを気遣う10歳のフィービーはまるで彼の保護者のようである。妹は「兄さんは世の中に起こることが何もか

もいやなんでしょう」と言い，「(好きなものを) 一つでも言ってごらんなさい」と言って兄をたじろがす (263)。そして「兄さんは将来何になりたいの」と問い詰められて，「ライ麦畑の捕らえ人」になりたいと答える場面は圧巻である。

> "Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids , and nobody's around—nobody big, I mean— except me. And I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over the cliff—I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out from somewhere and *catch* them. That's all I'd do all day. I'd just be the catcher in the rye and all. I know it's crazy, but that's the only thing I'd really like to be. I know it's crazy." (173)

ここに登場する「ライ麦畑の捕らえ人」は，18世紀のスコットランド詩人，ロバート・バーンズの書いた歌詞に由来するものであり，その歌詞の原文は "If a body meet a body comin' thro' the rye…" と続く。実はホールデンは，ニューヨークのブロードウェイで，通りすがりの子どもが歩きながら歌うこの歌詞の "meet" を "catch" と聞き違いをして覚えていた。子どもが好きなホールデンは，その天使のような歌声を聞いて，沈み込んでいた気持ちが明るく晴れたという記憶があった。フィービーに質問された際に "catcher" という言葉がとっさに浮かんだのは，そうした背景があると想像できる。そしてそれが，『ライ麦畑でつかまえて』という小説のタイトルになったのではないかとも言われる。"meet" を "catch" と聞き違えたのは，子どもが親と離れて車道を危なげに歩いている姿を見たとき，自分が助けてやりたい，捕まえてあげたいという彼なりの切迫した心情の表れのように思われる。ホールデンの子どもに対する優しさが，この聞き違いにも表れているようだ。

ところで話は変わるが，ホールデンは普段，赤いハンチング帽をかぶっている。そして時々，帽子の鍔を後ろ向きにかぶることがある[9]。これはまさに，野球の「キャッチャー」の帽子のかぶり方と同じである。そして，ライ麦畑の "catcher" と野球のキャッチャーは無関係ではない。つまり，ホールデンは，子どもをこの手で受け止め，守ってやりたいという思いを込めてキャッチャーの帽子のかぶり方を真似ていたのだとも推測できる。

さて，妹との会話の翌日，心身共に疲れきったホールデンは，家には二度と帰らず，他の学校にも行かず，誰も自分のことを知らない西部のどこかへ行って仕事を見つけ，聾唖者のふりをして暮らすことを決心する。そして別れを告げにフィービーの学校へ行き，西部行きを記した手紙を渡して，妹を教室から博物館に呼び出してもらう。やってきたフィービーは，

驚いたことに大きな旅行カバンを持っており，自分もホールデンと一緒に西部に行くつもりだと言う。言い争いの後，ホールデンは妹に「僕はどこへも行かない，気が変わったんだ。うちに帰るよ」と言って安心させる。やがてそこを出て，公園内の馴染みの回転木馬に乗るフィービーを見守りながら，ベンチに座っているホールデンの気持ちはとても穏やかだった。そして，ホールデンが西部行きをやめて家に帰ることを約束をしたことに，安堵の表情を浮かべるフィービー。自分のことを心から信頼し，嬉しそうに手を振る妹の姿を見ていると，急に降り出した雨にずぶ濡れになったにもかかわらず，ホールデンは幸せを感じていた。フィービーの“innocent”な魂に触れることで，心のやすらぎを得たのであろう。

彼が素直になれる相手はフィービーの他にも，愛する亡き弟アリー，ガールフレンドのジェーン，行きずりで出会った尼僧達などがいるが，これらの人々によって象徴される“innocent”な世界では，警戒心も見栄も背伸びも必要ない。「ライ麦畑の捕らえ人」になりたいと思ったホールデンの気持ちは，まさに今妹を見守っている気持ちと通じる。自分が相手にとって必要とされる存在であることを知ったとき，人は幸福感で満たされることを，ホールデン自身も実感した瞬間であろう。

6．再出発～ホールデンの未来像

これまで，会話の場面を中心に，ホールデンのキャラクターを浮き彫りにしてきた。そして今私たちが知りたいのは，ホールデンに待ち受けている未来についてである。彼は永遠に17歳（小説は，16歳の時の出来事を，17歳になった主人公が回想しているものである。）のままなのであろうか。いつまでも斜に構えた態度で大人社会を批判しながら生きていくのか，それとも現実の社会に徐々にでも順応していくのかという問いが残る。

ここに，ベテイ・エプスというアメリカ人コラムニストが作者サリンジャーにインタビューをした時の興味深い記事がある。

> わたしはホールデンについてきいた。かれはおとなになるのでしょうか？『ライ麦畑』のつづきはあるのでしょうか？　読者はみんな，その答えを知りたがっています。…
>
> 彼はいった。すべてあの本にある。読みかえしてみたまえ。すべてあのなかにある。ホールデンはときの流れの，ある凍（い）てついた瞬間にすぎない。
>
> わたしはきいた。彼はおとなにならないんですね？　つづきはないと言うことですね？
>
> 彼はいった。本を読みたまえ。…すべては本のなかだ。それ以上つけくわえることはない。くりかえし，くりかえし，そういった。(10)

作者サリンジャーはホールデンの未来について，そのヒント（答え）は本の中にある，と繰り返し述べる。つまりホールデンの将来像については，私たち読者自身の解釈に委ねられていると言ってもよい。

そして一つのヒントとなるのは，スペンサー先生に対するホールデンの次の言葉である。「ねえ，先生。僕のことは心配なさらないで下さい。」「口先だけで言ってんじゃありません。大丈夫ですよ，僕は。いま，一つの時期を通り抜けようとしてるだけなんです。誰だって，いろんな時期を通り抜けて行くんじゃありませんか？」(27)。サリンジャーは，意図的にホールデンにこの言葉を言わせているように思われる。すなわちホールデンの状況は誰もが経験する通過儀礼的な一時期のものであり，まもなくそこから解放されることを作者は願っていたのではないか。さらに小説の最後で，ホールデンは次のように語る。

> … D. B. asked me what I thought about all this stuff I just finished telling you about. I didn't know what the hell to say. If you want to know the truth, I don't *know* what I think about it. I'm sorry I told so many people about it. About all I know is, I sort of *miss* everybody I told about. Even old Stradlater and Ackley, for instance. I think I even miss that goddam Maurice. It's funny. Don't ever tell anybody anything. If you do, you start missing everybody. (213-214)

ホールデンは，昨年の退学後３日間の出来事について何もかもを話してきたことを後悔しながらも，話に出てきた人たちが今ここにいないのが寂しいと感じている。自分が好意を持った人々は勿論のこと，敵意を抱いた相手さえ傍にいないことを寂しく思い，彼等のことを懐かしがっている。自己矛盾ともとれる彼の言葉は，読者に，ホールデンは後に社会に復帰するのではないかという可能性を予感させる。

小説では，彼は９月から再びどこか別の高校に戻ることになっており，ホールデンが新たに再出発を図ることが窺える。しかも，これまでのホールデンから脱皮した姿で前進しようとする明るい未来像がはっきり見えるようである。彼は学校を巣立った後，これまで“phony”と批難してきた多くの人々をできるだけ許容しようと努め，社会に順応する一人の人間（大人）として，自分を信じようとしているのではないだろうか。去年のクリスマス前，フィービーのために家に帰る決断をしたとき，すでにホールデン自身の中には，厳しくとも現実に立ち戻り，自分なりの歩みを始めようとする予兆があったことを，読者の一人として確信するものである。

そして彼の未来は，彼が接した中で最も影響のあったアントリーニ先生（後に彼に誤解を与える行為もあったが）の言葉に象徴されているように思う。それは，ホールデンの生き方を憂慮した先生が彼に渡したメモに示されている。すなわち，ホールデンのこれまでの生き方はまさに，未成熟な人間の特徴である「理想のために高貴な死にかたをする」道を突っ走っているようなものであった。しかし本当に大切なのは，そのような考え方・生き方から脱却し，成熟した人間として，「理想のために卑小な生を選ぼうとする」(293) 道を一歩ずつ進んで行く努力を惜しまないことである。ホールデンは今，そうした道を慎ましやかに進むことの重要性を自覚しているに違いない。

Ⅲ．おわりに

ホールデンは虚飾と偽善に満ちた大人社会を“phony”であると痛烈に批判しながら，自分も大人社会を生きていかねばならない一人の人間であることを自覚できないでいた。彼のキャラクターには，アイデンティティーの確立されていない未熟な人間性が映し出され，言わばモラトリアムの中で浮遊している若者の姿が投影されている。この作品が読者を魅了するのは，センシティブで傷つきやすく，孤独で寂しがり屋のホールデンが，いつの時代にも，また，どこにでもいるからではないか。

この小説を通して作者サリンジャーは，孤独に悩みつつも，心のつながりを求めて生きている現代のティーン・エージャー，すなわち“悩める若者たち”に共通するテーマを私たちに投げかけている。さらにサリンジャーは，人間の本質を突くテーマ，つまり自らの内に混在するホンネとタテマエの世界，いわば「虚」と「実」の世界の葛藤を，会話／対話と独白の対比によって鮮明に描いてみせたのである。

国内外を問わず，この小説に関する批評や解説，参考書は膨大な数に上る。1951年発刊当時，主人公ホールデンのキャラクターをめぐって賛否両論が沸き起こり，「優れた文学」と評される一方，「有害図書」に指定され排斥されている。しかし1968年には，1895年以降の73年間に及ぶアメリカ出版界のベストセラー25冊の１冊に選ばれている。この小説が，一人の少年のわずか３日間の経験談に過ぎないにもかかわらず，これほどまでに世代や国境を超えて読まれていることの秘密は，ホールデンの人間像だけでなく，小説をめぐる舞台背景にもあるだろう。最後に，そうした人気の秘密を３点にまとめてみたい。

１．第一に，若者の日常語を使って語りかけるという文体の魅力である。作品を読んでいるうちに，次々に繰り広げられる主人公の行動と，他者との出会いの物語によって，あたかも映像の１コマ１コマを見ているような鮮烈な印象を与えられ，読者はいつの間に

か自分と作中の主人公が，直接「対話」しているような錯覚を覚える。しかも，若者ことばでストレートに語りかけることで，作品が常に生き生きしたものに感じられる。

2．第二に，この作品は，思春期の通過儀礼的な青春小説と捉えられることだ。例えば，マーク・トウエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』[11]の系譜をもつ小説とも言われており，人間の成長過程で誰もが必ず通過する体験をテーマにしていることが，読者の共感を呼ぶ。少年の魂の遍歴は，主人公と同世代の若者はもちろんのこと，大人にとっても十分に共鳴できる内容である。読者は，主人公ホールデンの極端なまでのインチキに対する絶望と非難，大人の社会を敢然と拒絶しようとする彼の行動の軌跡に，無意識のうちに声援を送り，自己を同一化しているのではないだろうか。

3．第三に，作者サリンジャー自身のキャラクターの特異性が魅力を助長している点である。『ライ麦畑でつかまえて』を書いた後，マスコミの注目を避けようと，サリンジャーは34歳で早々と引退し，ニューハンプシャー州のコーニッシュで隠遁生活を始める。1965年，作者が46歳の時，『ハプワース16　1924』[12]を発表して以来，作品は一切発表されていない。にもかかわらず，サリンジャーの知名度はますます高まり，ミステリアスなヒーローとしてのイメージが膨らむ一方であった。サリンジャーの書斎には，未発表の原稿が隠されているのではないかという噂も出るほどで，このような話題性に富む生き方も人気の秘密の一因と思われる。

いつも孤独や自己懐疑に悩み，どこか危なげで不安定なキャラクターのホールデンは，大人の価値観に対してただ苦しみ悩むような反抗的な少年にとどまらない。現状への根源的な不満を持ちながらも，自分の居るべき場所や進むべき道はどこなのかという問いに対する答えを見つけられずにいるのだ。彼は常に内面と葛藤しながら自己の生き方を必死に模索し，自己の明確な存在意義を探し求めている。それはまさに「自分探し」の旅である。彼が批判していたものは決して自分以外の他者だけではなく，自らの内側にもあったのだ。これは若者に限らず，年代を超えた多くの人々にとっても永遠のテーマであるに違いない。作品の持つ魅力と普遍性はまさにここにある。

そしてまた，ホールデンの心を少なからず持った私たち読者もまた，彼と同様，「自分探し」の旅を続けているのである。

テクスト

Salinger, J. D., *The Catcher in the Rye,* (Boston : Little, Brown and Company, 1951).

J. D. サリンジャー著，野崎孝訳，『ライ麦畑でつかまえて』（白水社，1997）.

註

(1) ウオーレン・フレンチ著，田中啓史訳『サリンジャー研究』（荒地出版社，1979）p.22.

(2) 村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話２　サリンジャー戦記』（文芸春秋新書，2003）p.221.

(3) ホールデンの入院の理由は明確にされていない。小説では，「クリスマスの頃にへばっちゃってさ，そのためにこんな西部の町なんかに来て，静養しなきゃならなくなった。」（５），「僕が結核になりかかって，こんなとこへ来てからに，診察とかなんとか受けさせられてるのは，…ほんとは，病気なんじゃないんだ…。」（11），「多くの人たちが，ことに，この病院にいる精神分析の先生なんかがそうだけど，今度の九月から学校に戻ることになったら，一生懸命勉強するかって，終始僕にきくんだな。」（331）としか語られていないが，少なくとも病気から回復しつつあることは確かであろう。

(4) 斉藤環は，現代の若者の特徴を精神科医の立場から分析している。斉藤は，境界性人格障害または境界例と呼ばれる精神障害として，世界全体を「敵か見方か」のいずれかの極端でしか捉えられなくなり，常に物事の白か黒かをはっきりさせようとするあまり，グレイゾーンの存在を認めることができない未熟さを持った人々に言及している。そして，予測のつかない感情の浮き沈みと激しい行動化，そして何よりもその「魅力」が，周囲の人たちを様々に翻弄すると述べている。そしてその典型的な例として，主人公ホールデンが挙げられている。（NHK 人間講座８～９月「若者の心の SOS」／日本放送出版協会，2003 pp.49～52）

(5) この小説の冒頭に「母に捧ぐ」となっていることは注目される。

(6) 佐伯彰一は，イギリスの伝記作家ハミルトンの指摘を引用し，「『ライ麦畑でつかまえて』を支えるいま一つの底層が，作者自身の少年期のほとんど‘traumatic’な体験から発している。」と言及している。
歌田明弘編，『ユリイカ　第22巻３号』（青土社，1990）p.153.

(7) 正統派ユダヤ教の律法によれば，母親がユダヤ人でない者はユダヤ人とみなされない。ユダヤ人かどうかは母系による。

(8) Grundwald H. A. ed., *Salinger* (NewYork : Harper&Row, 1962) p. xxvii.

(9) 1952年アメリカの「シグネット・ブックス」から発行されたペーパー・バック版の表紙には，赤いハンチング帽を後ろ向きにかぶったホールデンが描かれている。

(10) 歌田明弘編，*Ibid.,* pp.88-89.
同書の中で，訳者の諸岡敏行は，ベテイ・エプスは，ルイジアナ州に住むテニスの得意なスポーツウーマンで，地元紙のコラムニストであり，また，サリンジャーとのインタビューの記事は1980年６月29日『アドヴォケイト』の日曜版に掲載された，と述べている（p.81）。

(11) *Adventures of Huckleberry Finn* (1885).
Mark Twain (1835-1910) の代表作。E. Hemingway (1899-1961) が「すべてのアメリカ小説はこの一冊の本に由来する」と評価したのは有名である。テーマは単なる少年の冒険物語ではなく，文明と自然の対立や社会問題，さらに人種問題等にも及んでいる。

(12) *Hapworth 16, 1924* (1965).
グラス家（The Glasses）という架空の一族を描いた小説で７歳のシーモアによる手紙の形式をとる。

参考文献

イアン・ハミルトン著，海保真夫訳，『サリンジャーをつかまえて』（文芸春秋社，1992）.

J. D. サリンジャー著，橋本福夫訳，『危険な年齢』（ダヴィッド社，1955）.

————，村上春樹訳，『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（白水社，2003）.

————，原田敬一訳，『ハプワース16　1924』（荒地出版社，1977）.

M. A. サリンジャー著，亀井よし子訳，『我が父サリンジャー』（新潮社，2001）.
ウオーレン・フレンチ著，田中啓史訳，『サリンジャー研究』（荒地出版社，1979）.
渥美昭夫・井上謙治，『サリンジャーの世界』（荒地出版社，1979）.
渥美昭夫他，『J. D. サリンジャー』（冬樹社，1977）.
安藤正瑛著，『アメリカ文学と禅』（英宝社，1981）.
竹内康浩著，「『らい麦畑でつかまえて』についてもう何も言いたくない」（荒地出版社，1998）.
田中啓史編，『イエローページ・サリンジャー』（荒地出版社，2000）.
田中啓介著，「『ライ麦畑のキャッチャー』の世界」（開文社，1994）.
繁尾久・武田勝彦著，『サリンジャーの文学』（文建書房，1979）.
森川展男，『サリンジャー』（中央新書，1998）.
Bloom, Harold. *J. D. Salinger* (NewYork : Chelsea House Publishers, 1987).
Gwynn F. L. and Blotner J. L., *The Fiction of J. D. Salinger* (Pittsburg : University of Pittsburgh Press, 1963).
Laser Marvin and Fruman Norman eds., *Studies in J. D. Salinger* (New York : The Odyssey Press, 1963).
Lundquist, James. *J. D. Salinger* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1979).